

## (論文内容の要旨)

これまでわが国で紹介されてきたアメリカ国民像は、国民国家の統合の歴史という視点からみると、大きく2つの見方に分かれてきた。ひとつは、伝統や「血」を基盤とした紐帯は有効ではなく、「自由」や「民主主義」のような普遍的な理念がアメリカの統合の基礎となっているという見方である。これに対して、社会史研究の蓄積にもとづいて描かれてきたもう1つのアメリカ像は、「私たち」意識の共有を拒まれた人びと、国民としてのメンバーシップを十分には認められない「他者」がアメリカ社会には常に存在しており、自由や民主主義のような普遍的な理念がじつさいには無力であったことを強調してきた。本論文は、このような研究史をふまえて、19世紀末から1930年代にかけてのカリフォルニアの多人種社会の事例研究をとおして、「普遍的」アメリカ像と、常に「他者」を創出し続けてきたアメリカ像との有機的関連を問い直し、アメリカにおける「国民」意識の構築の過程とその歴史的特質を明らかにしたものである。本論は計7章からなり、別に序論と結論が付されている。

序論「「境界」に立つ」では、アメリカ国民の形成にかんする日本とアメリカにおける研究史を上記のような2つの方向に整理したうえで、研究の視座と対象を設定している。本論文では、国民意識を検討するさいに、政治家や知識人の言説ではなく、草の根レベルの言説を重視する。また、本論文は、近年の拡大されたシティズンシップにかんする研究を参照しつつ、「コミュニティの成員として敬意と保護と権利を得る資格」を有する「私たち」とそのような資格を獲得できない「他者」とのあいだに構築される「境界」に注目する。具体的な研究対象としては、19世紀末から1930年代にかけてのカリフォルニア、とくにロサンゼルス地域がとりあげられる。この地域を対象として選択する理由としては、この地域が、白人中産階級が多数派であると同時に多人種社会であるという特徴をもち、20世紀アメリカを予見させる人口構成の社会が急速に発展しつつあったことが挙げられる。

本論の最初の2章では、アメリカにおける「私たち」意識の内実が検討される。第1章「「アメリカ化」とシティズンシップ」では、カリフォルニアにおける「アメリカ化」運動の活動の内容と運動を正当化する論理を検討し、シティズンシップの境界を構築する基盤が何であったのかを探っている。この地域の「アメリカ化」運動の中核を担った「カリフォルニア州移民および住居委員会」(C C I H)のプログラムの検討などから、運動の目指す「アメリカ化」は、衛生的で清潔な住宅で女性が「科学的・効率的」に家事をこなし「賢明に」消費する「アメリカの家庭」を基盤とすることが明らかとなった。住宅所有を前提とする「アメリカ的生活様式」と大量消費にもとづく「アメリカ的生活水準」こそが「アメリカ化」の基準であり、シティズンシップの境界はこの基準をふまえて構築されたのである。第2章「アメリカの「アメリカ化」」は、この「アメリカ化」の基準の適用が、その対象となる人種集団ごとにどのように異なる意味をもったかが考察される。「アメリカ化」運動は、対象となる人びとを人種集団に区分し、選択的に「アメリカ化」の対象とした。そのさい、「アメリカ的生活様式」への適応能力が、人種間の優先順位を設定するための指標として利用された。第2章の後半では、「アメリカ化」運動に、移民の「アメリカ化」だけでなく、アメリカ生まれの人びとにシティズンシップを再確認させる「アメリカのアメリカ化」の側面があったことが示される。たとえばロサンゼルス市の新興住宅地パロス・ヴェルデスでは、人種的・階級的に同質な住民がコミュニティの自治を担う「閉ざされた民主主義」が実現された。他方で、シティズンシップの要件を満たすことのできない階層や人種集団も、「アメリカ的生活様式」の達成を目標とする「未来を共有」することによって、国民意識の形成の一端を担っていたのである。

続く2つの章では、「私たち」と「他者」を隔てる境界の実態が考察される。第3章「「私たち」と「他者」の境界」では、日本人移民の排斥運動をめぐる草の根レベルの言説の分析から、「アメリカ化」運動と移民の排斥運動のあいだに表裏一体の関係が存在することを実証的に明らかにした。また、メキシコ系移民のおかれた状況の分析から、メキシコ系アメリカ人を「人種」集団としてとらえるまなざし

が社会的に構築されていく過程が示されると同時に、「白人」という「人種集団」の境界自体が流動的なものであることが明らかにされた。第4章「揺れる境界——草の根の地平から」ではさらに、社会空間において人種間に境界が構築される仕組みが事例に即して検討される。具体的には、住宅地における境界の設定、公立学校で「非白人」の子どもたちの隔離を求める動き、日常の生活空間における人種隔離、労働の場における人種集団間の関係などがとりあげられ、シティズンシップの境界が地域社会の力関係を反映しながら構築されたことが示されると同時に、多人種社会における境界が生活の側面によって変化し、流動的であることも明らかとなった。

本論の後半の3章では、多人種社会における人種集団間の関係が分析され、また、人種ごとに「アメリカ化」をめぐる実践にどのような特徴がみられたかが考察される。第5章「多人種社会」は、「白人／黒人」の二項対立的な枠組みにはあてはまらない多様な移民が流入するカリフォルニアの社会における人種、階級、ジェンダーなど社会を区分する諸カテゴリー間の相互関連を分析する。その結果、多人種社会では、「私たち」と「他者」のあいだの境界だけでなく、「他者」のなかでも各集団間で比較、交渉、協力、摩擦が繰り返され、重層的な力関係の網の目と差異化の視線が形成されたことが明らかとなった。第6章「境界」の外から——日本人移民の越境戦略」では、「他者」性と向き合いながらシティズンシップの境界を乗り越えようとした人種集団の事例として、日本人移民の越境戦略が検討される。アメリカでの「成功」を求めて勤勉に「米化」しようとする日本人移民の姿勢は、「私たち」の側からはむしろ「アメリカ的生活様式」に反するものとして受けとめられた。これに対して日本人移民の指導者たちは、日本人の「人種」的な「優秀性」を強調することによってアメリカのシティズンシップへの適合性を主張しようとした。ただし、この戦略は、アメリカ的価値観を「普遍的」なものとして内面化した二世のあいだでは必ずしも共有されなかった。他方で、日本人移民の「人種的連帯」は、カリフォルニアの他の人種集団によって参照されるモデルとなることもあった。第7章「それぞれの戦略——アフリカ系アメリカ人と「オリエンタル」」の前半部では、日本人移民の「経済的成功」がアフリカ系アメリカ人にとって模倣の対象となった

ことが示される。カリフォルニアの多人種社会では、アフリカ系住民もまた、複数の「非白人」集団のなかに自らを位置づけつつ「新しい黒人」としての人種意識を構築していったのである。これに対して、本章の後半部でとりあげられる中国系アメリカ人の場合には、「私たち」の側から与えられた「オリエンタル」という分類をむしろ積極的に引き受け、エキゾティシズムを商品化することによってシティズンシップの境界を乗り越えようとした。このように、カリフォルニアの多人種社会においては、人種集団ごとに多様な越境戦略が生み出されたのである。

「結び 草の根からの問題提起」では、本論の各章で解明された内容が以下の5点に整理されて提示されている。第1に、アメリカにおける「国民」形成の歴史のなかで20世紀前半が重要な意味をもつことが「アメリカ化」運動をめぐる草の根レベルの言説の検討から明らかとなった。第2に、「アメリカ化」運動で示されたシティズンシップの要件として「アメリカ的生活様式」の実践と「アメリカ的生活水準」の達成が重要な役割を果たしたことが示された。この点で、「アメリカ化」運動は、普遍的理念の教化というよりも、19世紀末から20世紀前半にかけてのアメリカ社会の変化に対応してシティズンシップの境界を創り直す運動として、歴史的な文脈のなかに位置づける必要があることが確認された。第3に、20世紀前半のシティズンシップの境界は「人種」という「血統」にもとづく基準によることが再確認された。また、「人種」による境界は、居住地域、労働市場、教育などそれぞれの社会空間の文脈によって異なり、流動性をもっていることが示された。第4に、ジェンダーと社会階層の区分が「人種」による区分と複雑に絡み合っていることが確認され、「私たち」意識が構築されるさいにジェンダー規範がどのような役割をはたしたかが「アメリカ的生活様式」をめぐる言説の分析をとおして具体的に解明された。第5に、「他者」の側からシティズンシップの境界を再定義しようとする多様な動きがあったことが、日本人移民、メキシコ系移民、アフリカ系アメリカ人、中国人移民などの「人種集団」の事例の検討をふまえて明らかにされた。

最終的に本論文は、アメリカ国民の統合理念として指摘されてきた「普遍性」については、「人種」による「私たち」と「他者」の区分を正当化する論理として歴

史的な文脈のなかで再定義される必要があること、他方で、実態としてのシティズンシップの境界は重層的・流動的であり、「他者」の側に位置づけられた人びとは、この流動性を利用しながら、アメリカ的理念の「普遍性」を武器として、多様な越境戦略を生み出したことを確認し、アメリカにおけるナショナリズム自体の構造の解明を今後の課題として提示している。

|     |                     |
|-----|---------------------|
| 氏 名 | まつもと ゆうこ<br>松 本 悠 子 |
|-----|---------------------|

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、19世紀末から1930年代にかけてのアメリカ合衆国における「国民」意識の構築の過程とその歴史的特質を、カリフォルニアの多人種社会の事例研究にもとづいて明らかにしたものである。

近代以降の国家における「国民」形成の問題は、対象とする地域を問わず近現代史研究における重要な研究テーマのひとつであるが、アメリカ史研究においては、しばしば「自由」や「民主主義」のような普遍的な理念が国民統合の基盤であることが強調され、エスニシティや「血統」のうえに構築されたヨーロッパ諸国の「国民」意識との異質性が指摘されてきた。他方で、アメリカにおける社会史研究は、人種、ジェンダー、階級などの要因によって「アメリカ国民」の内部で差別化がなされ、また、外部に排除される人びとが常に生みだされてきたことに強い関心を寄せてきた。本論文はこの2つのアメリカ史像と批判的に向き合い、「普遍的」な理念を掲げた「アメリカ国民」の統合と「他者」を常に創出し続けるアメリカ社会のメカニズムとが密接に関連しているという認識に立ちながら、両者の関係のあり方を具体的な事例にもとづいて考察している。

そのさい、本論文の著者は、次のような研究上の戦略を採用している。第1に、著者は、集団的実体としての「国民」そのものよりもむしろ、「私たち」(アメリカ国民の成員としての敬意と保護と権利を得る資格がある人びと)と「他者」(排除され、社会に認められず、権利も得られない人びと)とのあいだに引かれる「境界」に注目し、その構築性と流動性を明らかにしようとした。第2に、本論文の考察は主として「私たち」と「他者」をめぐる言説の分析にもとづいて展開されるが、そのさい地域の草の根レベルの言説に着目することによって、政治的エリートや知識人ではない「普通の人びと」の集団的な自己意識と他者認識の特徴を解明することを目指した。第3に、「白人／黒人」の二項対立的な枠組みでは把握できないカリフォルニアの多人種的な社会を検討の対象として選択することによって、「アメリ

カ化」を追求する実践の多様性や、複数の人種集団のあいだで繰り広げられる接触、競争、対立、模倣、協力といった複雑な関係の実態に光をあてようとした。これらの視点を設定することによって、本論文は以下に述べるような具体的な成果をあげている。

第1に、「私たち」に帰属する基準として主張された「アメリカ化」の内実は、住宅の所有を前提とする「アメリカ的生活様式」と大量消費にもとづく「アメリカ的生活水準」にほかならないこと、また、シティズンシップの境界を設定するさいに、この基準がしばしば「人種」間の能力差を表す指標として利用されたことが示された。この点で「アメリカ化運動」は普遍的理念を教化し具体化する運動であるよりも、むしろ新たな移民の流入と消費社会への移行にともなうアメリカ社会の構造的な変化のなかでシティズンシップの「境界」を創り直す運動であったことが明らかとなった。

第2に、「アメリカ化」運動と特定の人種集団の排除を求める運動とが表裏一体の関係にあったことが、カリフォルニアにおける日本人移民の排斥をめぐる言説の分析にもとづいて具体的に論証された。また、「白人」の人種的境界自体が流動的であり、居住する地域や労働の場における各人種集団間の接触の形態や力関係によって「私たち」と「他者」との境界の認識が変化することが示された。

第3に、「白人」「黒人」以外に複数の人種集団が存在するカリフォルニアの社会では、それぞれの人種集団が他の集団を差異化する視線をもち、各人種集団間に重層的な関係が構築されていることが明らかとなった。また、「境界」を越えてシティズンシップの獲得を目指す運動にかんしても人種集団ごとに多様な戦略が編み出されたことを、日本人移民、アフリカ系アメリカ人、中国人移民のそれぞれの事例について実証的に明らかにした。

また、「私たち」と「他者」の境界においては「人種」とジェンダーが複雑に交錯しており、「アメリカ的生活様式」を基準として特定の人種集団を「他者」化するレトリックが構築されるさいにどのようにジェンダー規範が組み込まれていたかを具体的に解明した点も、本論文の功績のひとつに数えられるであろう。

全体として本論文は、国民国家としてのアメリカにおいて、「人種」による集団の区分が「私たち」と「他者」とを隔てるシティズンシップの「境界」を正当化するために利用される一方で、「他者」の側にも「アメリカ化」を主体的にとらえ返し、多様な越境の戦略を生みだす動きがみられたことを、具体的な事例にもとづいて明らかにしている。研究対象を特定の人種集団に限定せず、複数の人種集団を取りあげ、集団間の関係をみることによって多人種社会における包摂と排除の構造を全体として解明したことは、本論文の功績として高く評価される点である。また、カリフォルニアの地域的な刊行物や社会学者による「人種関係調査」（1924～26年）など従来の研究者が十分に参照してこなかった史料を活用しながら議論を進めていること、叙述と論理展開が論文全体をとおして一貫していることも、本論文の説得力を高めている。他方で、コミュニティにおけるメンバーシップと「国民」としての地位とのあいだに介在する法的・制度的な諸関係についての説明が十分になされていないこと、英語以外の言語を母語とする社会集団の言説を分析するさいに史料の使用言語にかんする考察がなされていないことなど、改善の余地の残る点もある。しかし、これらの点は本論文の全体としての意義を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2008年7月3日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。